「民族衣装のメッセージ」

　弊化学兵器禁止機関はおかげさまで設立１８年を迎えます。おなじ軍縮機関でも核軍縮、生物学兵器関連機関が軒並み政治の荒波にもまれて右往左往する中、弊機関だけはまがりなりに事故もおこさず、メディアにも叩かれず、ノーベル平和賞もいただいたりと、それなりに成果をあげてこれたのは僥倖でありました。まったく時の経つのは早いもので、８７カ国の加盟で出発した弊機関もいまでは参加国１９０を数えます。加盟国が１９０にもなると加盟国会議や執行理事会も賑やかになり、代表団はさまざまな民族衣装で登場する。それはそれはじつにカラフルかつ華やかであります。

　国際機関というところはほんとうに民族衣装のオンパレードなのでありまして、会議だけでなくレセプションなんかは民族衣装のキャットウォークといってもよい。そこで世界のさまざまなモードを眺めながら思うのですが、各国代表たちは民族衣装の醸し出す効果をしっかり計算して装っているのではないか、民族衣装は強烈なファッションステートメントであり、ステートメントであるからそこからはメッセージが発信されているわけで、本日はそんなナショナルコスチュームを眺めながら考えたお話です。

　まず彼らが狙っているのは、民族衣装の政治的効果でありましょうか。アフリカ、アラブ諸国の代表たちとかインド、パキスタンの外交官たち。インドのネール首相、パキスタンのブット首相、マレーシアのマハティール首相など歴代の首脳は民族服の常用者であり、それがそのままトレードマークになっておりました。リビアのカダフィ大佐もナイジェリアのオバサンジョー大統領も彼の地の伝統的な装いで壇上にあがり、演説をするのである。それはなかなかよい景色であって、西洋のスーツなんか霞んでしまう。メンズモードの本にはビジネスにおけるパワースーツの必要が説かれておりますが、外交の場では民族衣装もパワースーツであり、その威力はなかなか侮れません。

　国際会議はメディアでも報道されるから、そういうフォーラムにおいて民族衣装を着用に及ぶというのは作戦としても巧妙であります。そのことをいちばんわかっていた政治家はインドのマハトマ・ガンジーだったでありましょう。ガンジーはイギリスで教育を受けたきわめて西洋風の紳士だったが、独立運動に際しては貧しい国民にアピールするためにグジャラとよばれるインドの民族服で国民の前に立った。とくに報道写真家のマーガレット・バークホワイトが撮ったガンジーの腰布姿は、彼の無抵抗主義思想をビジュアル化したようなもので、あの写真の国際社会へのインパクトは相当なものだった。あれだけでインドはイギリスに勝ったようなものだったわけですから、ガンジーに続いた第三世界の指導者たちが次々に民族衣装をまといながら主義主張をアピールしているのは故無しとしない。

　国連外交の中でも，民族衣装が政治の転換を大きく象徴した例があります。国連における中国の代表権が台湾から北京へ移った時のことである。共産主義の北京政権を中国の政党政府として承認することについてはアメリカがいちばん執拗に反対しつづけていたが、それが１９７１年に逆転したのです。

　その逆転決議のとき、あるアフリカの代表がアメリカ大使の目の前で歓喜の声を上げて踊りを踊ったことがあった。アメリカに対する過激な侮辱だったが、彼はこれを民族衣装を着てやったのである。ふつうのスーツだったらこれほどの効果はなかっただろう。アフリカの衣装でアフリカのダンスを踊ったから第三世界は北京を支持しているのだというメッセージがはっきりと、かつビジュアルに伝わったのであります。

　このエピソードには後日談があり、ペルーのデクレアル事務総長が退任するとき、後任候補としてアフリカの政治家の名前が挙がったことがありました。ところがその名前を一瞥したアメリカの大統領は、即座にひとこと「こいつはつぶせ」と命じたのでした。この候補が２０年前米国大使の前で民族衣装のまま踊りを踊ったアフリカの代表で、この大統領はあのとき国連大使をしていたブッシュ（父）氏だったという話。人生はカルマだというエピソードであります。

　つぎに、民族衣装には実用性ということがある。ビジネスの場において洋装に慣れてしまっているわたくしたちにはちょっと理解しにくいことかもしれませんが、事務局をみまわしてみてもナショナルコスチュームで出てくる国際機関職員というのはけっこういるのです。ジュネーブの国連人権センターにいたヴェトナムの女性はいつもアオザイを着ていましたが、アオザイなんて西洋のオフィスには場違いではないかと思えようがそんなことはなく、書類を抱えて会議に赴く時、また事務室でメモを書いたり電話をかけていたりする彼女の動作はなんとも自然に風景にとけ込んでいたのであります。

　いまのわたくしの職場でも、インドの女性がサルワー・カミーズというインドのドレスを着てまいります。サルワー・カミーズというのは、ま、いうならばインド風のパンツ・スーツである。コットンやシルクでできていて、サリーとはまた違ってたいへんに軽やかであります。彼女は広報を担当しているが、インド服でニュースを切り盛りしている様はまさに「国際機関的」と言えるので、弊機関のイメージのためにもたいへんよろしい。

　また、べつのアフリカの同僚は、夏場にはうらやましいくらいクールビズそのままの風通しのよさそうな衣装で出てくる。キタンゲとよばれる典型的なアフリカのドレスですが、素材はコットン、リネン、シルク。彼女の説明によると，アフリカンは男も女もドレスの上からもカラダの線をしっかり見せたがるのだといい、だから女性用キタンゲのデザインはコカコーラの壜の形そのままであります。男はこれにマサイ・ブランケットという肩がけを羽織る。女性のには肩にフリルがつき、これが飾りになっている。

　同じアフリカでも、あの大陸はとてつもなく広いですから東と西、南と北でデザインが違う。彼女のキタンゲはケニアのデザインだということでした。

　リネンなどを素材にするとすぐ皺になってしまうので、シャツの襟につけるようなスターチをつける。これをワックスとよぶのですが、キタンゲは近所のドライクリーニングで洗うことはできるけれど、ワックスだけは服を作ってくれた店まで持っていかなければできないらしい。すなわちアフリカまで持っていかないとパリッときれいにはならないのである。贅沢な話であります。

　つまり、ビジネスには西洋の服装のほうが合理的なのだと決めつけるのは、福沢諭吉的あるいは鹿鳴館的な発想だといえるのでありまして、アタマを切り替えてみれば、自らの文化に馴染んだふだんの衣装のほうが能率良く仕事ができることだってあるでしょう。そういう実用性を許容しているのが国際機関なのでありまして、それはひとつの立派なファッションステートメントなのであります。

　そして三番目に、民族衣装は眺めていて楽しいということがありましょう。フランク・シナトラは美人というのは触れるものではない、眺めて楽しむものだと言ったことがありましたが（もっとも本人はこのルールを守ったことはない）、民族衣装もそういったものだ。狭い建物の中でさえこのようないろいろな民族衣装と出会うことができるのは国際機関の特徴なのでありまして、サリーやキタンゲ、チャイナ・ドレスやアオザイ、さらにはアラブ諸国のホッガー（サハラ地域のドレスですね）などが仕事場を行き来するなんて、民間企業ではとんとお目にかかることのない風景ではないかな。いいものです。

　さて、そこで我が和服である。在外大使館や国際機関代表部が催す祝祭や新年の祝賀の席には、着物のご婦人、羽織袴の紳士をお見受けします。袴を召した男性もなかなか凛々しいが、ご婦人がたの和服は季節をおもんぱかってそれはそれは美しい。わたくしも和服は好きなのでついつい見とれてしまうのですが（見るだけ。シナトラみたいに）、たとえば去年、夏場のレセプションでお見受けした夏大島（なつおおしま）とか生紬（なまつむぎ）、もちろんウールもあるが、みなさん、それぞれに持っておられるのですな、それらに浜木綿、蟹、鮎などの夏の模様、また秋草とか薄とか竜田川なんぞ一歩先んじて初秋のモチーフをあしらい、大層涼しげな風情でありました。

　帯で趣向を凝らす方もいらして、絽つづれ、粗紗（あらしゃ）など、いいものです。

　そんななかにわたくしは黒の留袖を召している方を見かけ、ドキッとしてしまいましたね。カラフルな和装に混じって黒留袖というのは目立つだけでなく緊張感のあるもので、その方はかつて東山重阿弥寮での東山衣装比べとして知られる故事をふまえて遊ばれたのだろうか。

　東山衣装比べとは、元禄の豪商たちが東山に集まり、正室、側室にきらびやかな服を着せて豪奢を競ったというあの話である。夫人たちがつぎつぎに袖に金箔を散らしたり、贔屓の歌舞伎役者の家紋を縫い込んだり、綬子の小袖に花鳥文様を散らしたりという豪華絢爛な衣装を競って遊んだのですが、そこへ最後に登場したのが緒方光琳の後援者だった中村内蔵助の妻。彼女は光琳のアイデアで白無垢の重ね着に漆黒の帯を締め、黒羽の打ち掛けを被って出てきたのでした。白と黒のコントラストという極限の美で、居並ぶ豪華衣装がみな色を失ったという光琳のあの逸話である。

　民族衣装にはこのようなおもしろい逸話や物語がついてまわります。ファッション雑誌「ウィメンズウェアデイリー」の社主であるジョン・フェアチャイルド氏が「 Good taste, like education, opens new opportunities for the enjoyment of life 趣味の良さというのは、教育と同じように、人生の楽しさをひろげてくれるものだ」と言ったことがあります。民族衣装は誰がみても美しい。だがそれ以上に着物にまつわる光琳の話とか、キタンゲの来歴とか、ホッガーの由来などを聞き知っていると、レセプションも百倍楽しくなりますね。

　話をはじめの「民族衣装の政治的効果」に戻してみますが、国際機関の会議の場においてメッセージを伝える道具はスピーチだけではない。コミュニケーションの方法に non-verbal communication というのがありますね。ちょっとした素振りとか目の動きで意思を伝えることをいうのですが、記録に残るロゴスだけでなく、演説しているスピーカーを小馬鹿にするようにプイと横を向くとか、わざとアクビをするとか、そういうジェスチャーもメッセージなのであります。

　国際会議の場でさまざまな民族衣装に出会うことは、さまざまな異文化が存在することをビジュアルに体感することであります。そして、その多様さがそれぞれ深いルーツを持っていることに気づき、たじろぐことでもあります。アフマディネジャド大統領（イラン）やオバサンジョー大統領（ナイジェリア）がフォーラムに登場してくるとき、彼らは単純に自国の伝統を表示するために国民服や宗教的な衣装をまとって出てくるのではない。彼らは意気込みや信念を明確に伝えんとして装ってくるのです。民族衣装でなされるスピーチはパンチがあり、なによりも視覚的に説得力がある。外交の場におけるエスニックなファッションはそのように政治的なステートメントなのでありまして、そのファッションに託されたメッセージの意味と深さを読みとれるかどうか、それも外交における技術であり教養ということではないか、とわたくしは思うのです。

　外交の場では、すべての行為に意味があるのであります。